

【文学賞】

あなたがどて煮でも好き

長谷川 彩 香

いよいよベッドから起き上がるのも億劫になった朝、わたしは最後の生気を振り絞って船橋駅に向かった。東武百貨店のワコールで、今のところ使用する予定のないブライダル用インナーを購入するためだ。

「この度はおめでとうございます」

上品な販売員に深々と頭を下げられ、わたしは曖昧に微笑む。ブライダルインナーを買いにくる人はあらかた皆、おめでたい人たちなのだ。

「挙式用ですか？ フォトウェディングでしょうか？」

この質問は想定をしていたので、「挙式自体はまだ先なんですけど、ドレスの試着がそろそろ始まるので買っておこうかと」となぞるように答える。販売員は「そうなのですね」と尻に皺を寄せて微笑み、わたしを試着室に案内する。

「ではまずバストの計測をするので、下着になっていただけますでしょうか。キャミソールなどのインナーは着ていただいて構いませんので」

百貨店らしい一礼をして、販売員はカーテンを閉める。わたしはふうと息をついて、ようやく呼吸ができるようになる。ブラウスを脱ぎ、大きな鏡で自分と向き合う。鎖骨が浮き出て、バストの位置も低く、貧相な上半身。ここ数日何も食べていないこともあり、なんだか生命力がない。

……わたしは一体、なにをしているんだろう。

「楓子ちゃんは、俺と結婚したかっただけなんだね」

あの日の悲しそうな星原さんの言葉が浮かび、わたしの脳は素手で掴まれたようにぐわんと揺れる。

* * *

子どもは親を選べないというが、選べないものといえは苗字も同じだと思う。

「婚約おめでとぅー!!」

八月に東銀座で亜香里とランチをした。亜香里は大学で同じ学部だった友人で、卒業し

てからは新型コロナウイルスの影響で疎遠になっていたが、わたしがInstagramに投稿した婚約報告投稿を見て「久しぶりに会おうよ!」と連絡をくれたのだ。

「ありがとう。遅くなっちゃったけど亜香里もおめでとう!」

「いいい。苗字は何になるの?」

「星原。お星さまに、原っぱで星原。」

「ほしはら〜!? ほしはらうこ 星原楓子になるの!」

芸名みたいじゃん、と亜香里が目を丸くする。わたしは得意げになりすぎないように、「おしゃれだよね」と、あくまで平静を装って返す。運ばれてきたオーガニックティーは、色はついているものの味が薄い気がしている。

「旦那さんが楓子の苗字にするって選択肢はないの?」

どきつとする。亜香里は純粹に疑問、という雰囲気で「楓子の苗字って結構珍しいんでしょ? 全国に何人いるんだっけ?」と続ける。

「うーん、まあ別に由緒正しい家柄とかじゃないしね」

亜香里は昨年結婚したが、苗字が変わっていない。どうやら亜香里も旦那もお互いに苗字へのこだわりがなく、入籍日にじゃんけんで勝った方の苗字にすることにしたそうだ。なんというか、亜香里らしい。これ以上この話を深掘りされないように「そういえば」と口を開いた瞬間、

「ハッピーウエディングー！」

店員がデザートプレート運んできた。リビングの丸時計より大きな皿には、四種のケーキが盛られていて、チョコソースで「Happy Wedding Fuko」と書かれている。大きな皿の縁はホイップクリームで囲まれ、アラザンがたっぷりかかっている。まさか、ランチでこんなハイカロリーそうなデザートプレートが出てくるとは。サラダボウルではなく、本日のパスタをしっかりといたってしまったことを少し後悔する。

「もう楓子のこと、マルフウって呼べないね」

あたし好きだったけどな丸見って苗字なんか可愛いじゃん。亜香里がガトーシヨコラをつつきながらつぶやく。わたしは大っ嫌いだったよ、「丸見」から離れられてせいせいするの……とはもちろん言わない。わたしは、一番カロリーが低そうなシンプルめのチーズケーキに手を伸ばす。マルフウなんて呼んでほしくなかった……とも、もちろん言えない。代わりに、

「今日の夜ご飯は抜きかな」

と、亜香里に聞こえるか聞こえないか微妙な大ききで、独り言ちてみる。

ちなみにその日のお会計は、デザートプレートも込みでしっかり割り勘だった。

* * *

丸見楓子。まるみふうこ。

今年で二十九歳になるわたしは、小学生のときにAKB48が一世を風靡していた世代だったので、「たかみな」「こじはる」のように苗字と名前の一部を取って呼び合うのが流行っていた。

わたしの場合は、マルフウ。

そして、当時のわたしはかなりの肥満児だったのだ。

「忘れもしない小学校三年生のある日。休みの生徒がいたため、給食で揚げパンが一つ残っていた。揚げパンの中でも一番人気のココア揚げパン。わたしも当然お代わりじゃんけんに参加して、勝ち取ることができたのだ。今日はついてる！ニコニコしながらぶりついたそのとき、

「あんなに食うから太るんだろ」

後ろから投げつけられた言葉が、自分に向けられたものと初めは気が付かなかった。

「マルフウじゃなくてマルブーだろ」

ようやく、わたしに言っていると気が付く。揚げパンじゃんけんでは勝てなかった、クラスのがき大将の言葉だった。揚げパンを持つ自分の指を見て、人生で初めて「太い」と思う。

「丸々太った豚みてえだもんな、マルブルー！」

こら！ 先生が叱り飛ばすが、わたしはバケツいっぱい冷水を浴びせられたような気持ちになり、吐き気がした。結局お代わりした揚げパンを残してしまった。

その日、掃除の時間も五時間目も六時間目も誰とも話さずに帰宅すると、いつも通りダイニングテーブルの上に、カップ麺、大きなコッペパン、六本入りのチョコスティックが置かれていた。大体その三点セットが、わたしの毎日の夕飯だった。両親はわたしが物心ついたときには事実上の離婚をしていて、わたしは母と二人で暮らしていた。母がヒステリックだから父が外に女を作ったのか、父に新しい女がいるから母はヒステリックなのか、どちらが先かは分からない。分かるのは、わたしがどちらからも必要な子ではなかったということ。大切にする価値がなかったということ。母はいつも夕方から明け方までスナックで働いていたので生活リズムもすれ違い、寂しくて寂しくて、いつもカーテンにくるまってパンを食べていた。

どうしてわたしは、ここにいない人の苗字を名乗らないといけないんだろう。

その日、誰もいない家の中で初めてそんな気持ち芽生えた。ほぼ記憶のない父親のせいで、わたしは「丸見」姓だし、「マルブルー」なんて呼ばれてしまう。むしろくしゃして、用意されていた麺もパンも全て食べてしまった。こんなことをしているから、太るのに。「マルブルー」なんて呼ばれるのに！ 孤独と悲しみの止め方を、当時のわたしは他に知ら

なかった。

両親は世間体を気にして別れないのか、裏にどんな理由があったのかは分からない。わたしの苗字は父方の「丸見」から変わることとはとうとうなかった。

* * *

「お客様、ご準備はいかがですか？」

試着室の外から、販売員が声をかけてくる。キャミソール姿のまま「大丈夫です」と声をかけると、さっそくバストの採寸が始まった。

「失礼いたしますね」

真後ろから胸元にメジャーを回されて、少し緊張して身体が固くなる。わたしが初めてブラジャーを着けたのはいつだったっけ。周りより胸が膨らむのが早かったはずだけど、着け始めたのは遅かったような気がする……。

「えっと……」

この三日間ほとんど食事が喉を通らなかったため、太っているわけはないと頭では分かっているが、やはりマイサイズを告げられるというのは判決を言い渡される気分だった。

「Aの六十五ですね」

ほっとする。よかった、太ってはいない。

「ブライダルインナーの種類はいかがいたしますか？ トップス部分がブラジャーとウエストニッパーに分かれているセパレートタイプと、一体となっているビスチェタイプがございます」

「え……っと……」

これは想定していなかった質問だった。言葉に詰まるわたしを見て、販売員はその反応も想定内というように

「ドレスの形に合わせて選ぶ方も多いですが、これから決められるとのことでしたので、どちらも試着してみましようか」

と、優しく声をかけてくれる。わたしは曖昧に頷いた。

どんなウエディングドレスを着るのかなんて、考えられるはずがない。というか、そんな資格もない。わたしは、わたしのせいで婚約破棄になっているのだから。

* * *

星原さんとは、マッチングアプリで出会った。

社会人になってすぐに新型コロナウイルスが流行して、不要不急の外出は悪になった。制限がようやく落ち着いてきたころ、わたしはいわゆる結婚適齢期の二十七歳になっていた。社交的な性格でもなければ、異性の友人がいるわけでもない。小さな会社の事務職なので、職場での出会いもない。それでも、結婚願望はあった。自分で選んだ人と、新しい家族を作りたいかったのだ。学生時代から付き合っていたカップルがどんどん結婚していく中、何か行動しなくては……と思い、街中で広告をよく見るマッチングアプリに登録してみた。

マッチングアプリを使うには、当たり前だがまず自分の情報を登録しないといけないらしい。とりあえず、定型自己紹介を少しだけいじって、カメラロールの一番上にあった新作フラベチーノの写真を登録すると、異性がずらりと並ぶページへと飛んだ。スクロールしてもしても出てくる男性の顔写真、出身地、年齢。カタログのようで目がチカチカした。自分の写真を載せる勇気がなく（そもそもコロナ禍だったので学生時代の写真しかなかった）飲み物の写真に逃げてしまったが、逆に、自分たちもこのように精査されているのだろうか。マッチングアプリ以外に出会う場所などない、と軽い気持ちで登録したが、ルツギズムの海に放流されたのだと悟り、怖くなつてそのまま眠ってしまった。

朝起きると、見慣れないアイコンの通知が来ていた。昨夜登録したマッチングアプリで誰かからメッセージが来ているのだと、理解するのに時間がかかった。

『初めまして。僕もその新しいフラペチーノが好きで、ほぼ毎日飲んでいます。ホワイ
トモカシロップを追加すると更にクリーミーになって美味しいですよ』

なんだこれ、カフェの回し者？　と思つて差出人のプロフィールを見に行つたが、公務
員だった。年齢はわたしの一つ上、わたしと同じテンプレートを変更したプロフィール文、
顔写真真一枚だけ登録されていてメガネをかけていることは分かつたが、明らかに集合写
真の切り抜きで画質が悪かつた。怪しさ満点だったが、家と職場の往復で精一杯な日常に、
ほんの少しの非日常が割り込んできたような気がして、わたしは退勤後にホワイトモカシ
ロップを追加した新作フラペチーノを飲んでみた。

その日の夜、『わたしはこの新作はまだ一回しか飲んでなかったので、教えていただい
たカスタマイズを試してみました。ホワイトチョコの風味が出ていておいしかったです』
とメッセージを返すと、『え！　早速飲んでくださったんですね、嬉しいです^(^M^)』という、
やはりカフェの回し者かと疑いたくなる返信が来た。その後も、『今日は釜揚げうどんが
半額だったので、大盛りを食べました』『ピーターパンのメロンパンが美味しいですよ』
など、出会う気があるのかないのかよくわからないテンションのメッセージが一月ほど
続き、とうとうわたしの方から「会いませんか」と言つた。

そうして出会つたのが、星原さんだったのだ。

* * *

「お待たせいたしました。まずこちらがセパレートタイプでございます」

最初に販売員が持ってきたのは、バスト部分と胸の下からウエスト部分で分かれているセパレートタイプというものだった。

「ブラジャーとウエストニッパに分かれているので、より締めつけが強く補正力が高いものになります」

さっそく着けてもらったが、ものすごく苦しい。何も食べていないのに、胃液が飛び出てきそうだった。これをつけて挙式と披露宴を乗り越えるなんて、花嫁は大変だな……と他人事のように思う。というか、結婚する予定がない人間が、なぜこんなところでブラインナーを着けて苦しい思いをしているんだろう……。

「こちらがビスチェタイプになります。先ほどのものに比べて締めつけ感は少なめになります」

今度は胸元とウエスト部分が一体化している形のインナーを見せてもらった。一つ一つ丁寧にホックを締めてもらうと、ホックが一つ締まるたびに自分の姿勢が正しくなっていくような心地になった。

「終りましたよ」

鏡を見たわたしは思わず

「すごい……」

と心の声が漏れ出てしまった。魔法みたい、と思った。数分前に貧相な上半身だと思っていたが、胸元のボリューム感が増し、ウエストは更に細くなっていて、メリハリのある身体に変身していた。ここ三日ほとんど食事をしておらず、船橋に来るのもふらふらだったのに、身体の中からパワーがみなぎってくるような気がした。これが、欲しい。

心は決まっていたが、一応「ビスチェタイプだと、セパレートよりあまり細く見えないでしょうか？」と尋ねてみる。

「そうですねえ、お客様はもともと華奢でいらつしやいますから……胸元とウエストも、どちらかが極端に細いということもなくバランスがいいので、ビスチェタイプの方でもまったく問題ないかと思えますよ。問題ないと言いますか、今着用されているの見てごくお似合いだなと思いました」

華奢。約三十年の人生でほとんど縁がなかった単語が、わたしの骨の髄まで染み入っていく。

「じゃあ、このビスチェタイプの方をください」

一番欲しかった言葉をもらえる身体になったのに、わたしは一番大切にしているものを間違

えてしまった。

* * *

初めて星原さんに会った日、わたしたちは新船橋駅で待ち合わせをした。待ち合わせの十分前に着いたところ、改札を出たところに恐らくあの人がそうだろうな……と思う人が立っていた。黒縁眼鏡に柔らかそうな黒髪、身長は百七十センチくらいだろう。白いシャツに黒いスキニーという、極めてアラサー男性の平均的な姿の人が立っていた。緊張しながら、

「あの……ホシさんでしょうか？」

と声をかけると、男性はぱつと笑顔になって

「そうです！ ふうこさんですよ。お会いできて嬉しいです」

と微笑んだ。メッセージで想像していた人物像に比べて、意外と声が低いんだと思った。

「ふうこさん、ここまで結構遠かったですか？」

「いえ、鎌ヶ谷から一本なのでとても楽でした」

わたしたちは当たり障りない会話をしながら、駅を出てすぐのところにあるイオンモールのイタリアンレストランへ向かった。マッチングアプリでのトラブルもよく聞くの

で、シヨッピングモール内なら危険な思いをすることもないだろうと思いいわし指定した場所だったが、予約は彼がしてくれていた。恋愛経験がほほないわたしが、マッチングアプリで初めて男性と会うというのに、彼の穏やかな雰囲気のおかげか不思議と緊張しなかった。

店に着くと、彼が店員さんに名前を告げた。

「予約しているホシハラです」

ホシハラ…？ 濁りがなく美しい響きにわたしは釘付けになる。

「ホシさんって、ホシハラさんが本名なんですか？」

着席するなり勢いよく尋ねると、

「そうなんです。お星さまに原っぱで星原です」

「素敵な苗字ですね……」

心の底からそう思った。芸名みたいだし、「星」というのはやはり輝いているイメージがある。わたしの「マルブルー」のきつかけとなった「丸見」とは大違いだ。いいな。わたしも、自分の苗字が星原だったら、小学生のときにあんな悲しい思いをすることもなかったのだろうか……。

「パン食べ放題のセットがあるんですね！ 嬉しいなあ！」

メニューを開いた星原さんが喜びの声をあげるが、わたしは苗字のあれこれを思い返し

てしまっており、すぐにリアクションができなかった。そんなわたしの反応に不安になったのか、

「……あ、でも楓子さんは食べ放題だとしても、そこまでたくさん食べられないですかね……?」

と氣を使ってくれた。

このわたしが、たくさん食べられるか心配されるだなんて。嬉しさと切なさで胸がきゅつとなる。社会人になって実家を出てから食事の栄養バランスに氣をえるようになり、わたしはいつの間にか標準体型より少しスリムになっていた。昔はまるまると太っていて「マルブー」と揶揄されていたと話しても、きつと信じてもらえないだろう。

「いいえ、わたしバン大好きなんです。ぜひ食べ放題にしましょう」

「じゃあ注文するね」

「お願いします。……あつ」

店員さんと呼ばうと後ろを振り向いた星原さんの首元に、商品タグがついていた。おろしたてのシャツで着てくれたのだろうか。心臓がきゅうとなる。

「あの、すみません。ちょっと一瞬そのままでもいいですか?」

「え? うん」

わたしは急いでポーチから爪切りを取り出し、星原さんの首元まで手を伸ばしてぱつん

とタグを切った。切るときにちょっと音が出ちゃったけれど、きつと気づかれてはいないだろう。

「首元に糸くずが付いていたので……でももう取れました。大丈夫です」

「え！　ありがとう。ふうこさん、優しいね」

星原さんが温かく微笑んでいたの、わたしも嬉しい気持ちになりながら、こっそりタグをポケットにしまった。

わたしたちは三回目のデートで付き合うことになった。幼いころから実家で一人ぼっちで、大人になってからもコロナ禍で隔離されていたこともあり、自分が誰かと一緒に生きていくという想像がでなかったのだが、それをひょいと乗り越えてくれたのが星原さんだった。孤独に慣れてしまったわたしに、たっぷりの安心感くれたのが、星原さんだった。とんとん拍子で事は進み、わたしたちは交際一年記念日に婚約をした。それが、今から二か月前のことだ。

* * *

試着室を出てレジに向かうと、販売員が丁寧な梱包をしながら穏やかな口調で話しかけ

てくる。

「京成の方の駅前に麻辣湯のお店があるの、ご存じですか？」

「いえ……」

京成船橋の方は居酒屋やキャッチが多く、なんとなく怖いイメージがあつたのであまり近づかないようにしていた。

「自分で好きな具材を選べるんです。お野菜がたくさん取れてヘルシーですし、挙式前ダイエットにもおすすめですよ」

全員にこの話をしているのか、わたしが体型を気にしていそうだから紹介してくれたのか、どちらだろうか。百貨店（ひゃくか）で営業をしているくらいだから、人を見抜く目があるのだろうか。いずれにせよ、全身が干からびていて顔色も悪い人間が飛び込んできても、快く接客してくれた彼女はプロフェッショナルなのだろう。

「ありがとうございます。体型管理には悩んでいるので……今日購入したインナーをずっと着けていたくらいです」

笑いながら冗談っぽく、でも本心を吐きだす。

「インナーはお客様の良さを引き出すものなので」販売員は手を止めてこちらをじっと見る。

「このインナーを着けた状態を『綺麗だ』と思ってもらえたなら大変光栄ですが、それ

は魔法でも何でもなく、お客様が元々お持ちの魅力を引き出しただけです」

彼女は店舗の入口までわたしを先導し、百貨店の立派な紙袋を差し出しながらニコリと笑った。ニコリ、と音が出そうな笑い方だった。

「行つてらっしゃいませ」

* * *

先週末、わたしの家で星原さんとゼクシィを開き「ガラス張りが綺麗」「ステンドグラスも素敵」など話しながら挙式会場を眺めていると、星原さんが「苗字はどっちのにしようか?」という何気ない様子で問いかけてきた。

当然、自分が「星原」になるものだと思つていたわたしは一瞬固まつてしまった。

「え? もちろんわたしが変えますよ、女ですし!」

「でも、女だから苗字を変えるつていうの時代に即していないつていうか……夫婦別姓を求められているような時代だし、男が変えるのも珍しくないし、大切なことだからちゃんと二人で考えたいなと思つて」

——空回りしている。確かに、苗字を変えたくないと思つている女性は今ではかなり多い。男性側が変えるという話もよく聞く。夫婦別姓が叫ばれているのもよく知っている。

だけど。

だけど、わたしはようやく大嫌いな「丸見」を捨てられると思っていたのに。

「だってさ、楓子ちゃん。俺も知らなかったんだけど『丸見』ってすごく珍しい苗字なんでしょ？」

スマホにメッセージの通知がくる。見遣ると母からだった。もう何年も会っていないが、さすがに今回ばかりは、と思い婚約報告と大体の挙式時期を連絡していたのだ。

「まあ、そうかもしれないけど……」

星原さんに対して曖昧に答えながらメッセージを開くと、そこには母から一言

『ご祝儀とか出せないから』

と来ているだけだった。

「それはおいおい話していくとしてさ、そろそろお腹すいたよね。初めて会ったパン食べ放題のお店行かない？ デザートに新作フラベチーノも飲みたいんだよね。今年はマロシンだって！」

「行かないよ」

結婚報告と言いながら、わたしは母に対してほんの少しだけ、幸せになる自分を見せつけたかった想いがあったのかもしれない。そこを見抜かれたのか。だとしても、「おめでとう」の一言もないのか。

「あれ、あんまりお腹空いてない？」

「珍しい苗字だからなんなの、時代の流れに即してないからなんなの？」

「楓子ちゃん？」

「苗字を変えたくない人がたくさんいるのは知っているよ、でもどうして苗字を変えた人がいるって思わないの？」

星原さんが目を丸くしている。出会った時からの癖が抜けずにずっと敬語で話していたが、もう気にする余裕がなかった。

「だいたいパン食べ放題のお店も行きたくないし、新作フラペチーノも飲みたくない！挙式に向けて痩せないといけないのに、無神経に誘ってこないで！」

「ごめん楓子ちゃん、全然気が付かなくて……でも、楓子ちゃんは痩せる必要なんてないよ。今すぐスリムだし、そのままで」

「太ったことない人には分からない！生まれつき『星原』なんて勝ち組の苗字の人には分からない！わたしなんて、毎日カロリーの高いパンばかり食べていたからデブで、『丸見楓子』なんて名前だったから『マルブー』って呼ばれてたのに、その苦しみを知らない人には分からない！結婚してようやく『丸見』を手放せると思ったのに！」

口に出した瞬間「あ」と思った。何かフォローしなければと思ったが、言葉が見つからなかった。長い沈黙の後、星原さんが重々しく口を開く。

「星原になりたかったの？ 楓子ちゃん」

呼吸が止まる。やってしまった。そうだけど、そうじゃないと言いたいのわたしは何も言えない。

「俺さ、楓子ちゃんに好きって言われたこともないし、楓子ちゃんから手を繋がれたこともないなって思っていたんだよね」

それでも、俺のこと好きでいてくれてるって信じてただけ……。星原さんは掠れる声で言っているのに、わたしは喉の奥がつかえたように、なぜだか声が出てこない。

「楓子ちゃんは、俺と結婚したかっただけなんだね」

今まで見たことがない、絶望の淵にいるような表情だった。

その日の夜、『結婚についても一度考えさせてほしい』という連絡が来た。事実上の婚約破棄だった。

* * *

ワコールを出て下りのエスカレーターに乗り、販売員の視界から外れたであろうタイミングで、わたしは購入した紙袋を抱えて走りだした。最後の一段は飛び降りて、一つ下の

階のトイレに駆け込む。個室に入るや否や、百貨店の紙袋をべりりと破り、薄い紙の丁寧な梱包を一心不乱に剥く。はやくはやく、と脳内のわたしがうるさい。はやくこれを着けなくちゃ、わたしが嫌いなわたしに戻ってしまいう前に。急かされるように、人より大きなメイクポーチに入っている爪切りを取り出す。大学生のとき、誘われるがまま顔を出したどこかのサークルの新入生歓迎会で「ネイル割れちゃった」と騒いでいた女に貸したら、お礼を言われるどころか「えゝ爪切りとか持ち歩いてんの？ お母さんみたいだね」と嘲笑された記憶が一瞬頭をよぎる。うるせえよ、と音にならないようにつぶやき、ワコールのタグを切る。

ああ、やつぱり。

わたしのブライダルインナーは、トイレの個室の中でも輝いていた。

狭い個室内で壁に何度も肘をぶつけながらなんとかトップスと下着を脱ぐ。上半身裸になつてからようやく、自分一人で着用するのはものすごく難しいことに気づく。ドレス姿を綺麗に見せる補正下着なので当然といえば当然なのだが、めちゃくちゃきつくて苦しいものなのだ。ホックを真後ろで止めることを断念し、右脇に寄せる。上から一つずつ順番

に、慎重に止めていく。体がどんどん締め付けられる。「苦しい」と思うけれど、不思議と嫌ではなかった。全て止め終わった後、ホックが真後ろにくるように回転させる。当然個室内には鏡がないので、着用した自分の姿は見られない。なぜ自分がわざわざ仕事を休んでブライダルインナーを買いに来たのか、ようやく分かった。わたしは星原さんに会いにこよう、と言い聞かせるように声に出す。

* * *

「星原さん！」

中肉中背、平均身長で薄顔のザ・一般的なサラリーマンの彼を、雑踏の中でわたしは即座に見つけられた。東武百貨店を出た後、退勤後の星原さんを出待ちしようと、彼の職場である船橋市役所の前まで行ったのだが、彼がいつ出てくるか分からないのに入り口をうろちよろしているのは客観的に見ても怪しすぎたので、京成船橋駅の近くで二時間近く待ちかまえていた。伝えたいことを、頭の中で何度も整理しながら。

「楓子ちゃん……？」

さすがの星原さんも、驚いた顔をしている。それも当然、わたしがアポなしで会いに来たことなどなかったから。

「どうしたの？ 何かあった？」

思いっきりストーカーのようなことをしてしまったので「婚姻破棄をした報復!」と怯えられるかと思っただけけれど、やっぱりまずはわたしのことを心配してくれる。

「星原さん」

星原さんは優しく、無防備だ。

「ん？」

駅に向かう人波の邪魔にならないよう、わたしの背中にそっと手を置いて、さりげなく脇道にそれたところに連れて行く。

「どうしたの？」

わたしが何も答えないので、星原さんはもう一度聞いてくれる。

「先週は傷つけてしまってごめんなさい」

「うん……」

「わたし」

自分以外の人間に、自分の中身を見せるのはこんなにも怖い。

「わたし……」

昔から自分のことが嫌いだった。太っていて、親に愛されない「丸見楓子」のままじゃ、親どころか他の人にも愛されないと思っていた。自分のことを早く捨てたいと思っていたい

て、こないだは順番を間違えて伝えてしまった。星原さんはわたしをずっと大切にしてくれたのに。だから決してあなたの苗字だけが欲しかったわけではない——という感じのことを言いたかったのに、次の瞬間のわたしは反芻していたことと違うことを口走っていた。

「わたし、どて煮が食べてみたいんです」

やばい、なんだこれ。星原さんに何か言う隙を与えず、わたしは息を吸う。

「今まで『どて煮』って名前の響きになんか抵抗があって、居酒屋でメニュー開くたびに目に入るのになんとなく避けてきたんです。でもわたし実はモツ好きだし、こう見えて吞兵衛だし、絶対どて煮も好きだと思うんです。それなのに、『どて』っていう音がなんだかどんくさいオットセイみたいで、食べたなら自分もそうなりそう……みたいな謎の強迫観念みたいなのがあって、意味わかんないですよ、でも本気でそう思っていたんです。隣の席で知らない人たちが食べているのを見るとめっちゃ美味しそうで、オットセイになってもいいから食べてみたいな……いやいやダメダメ、っていうのも思いとどまってるんです。本当は好きに決まってるんです、どて煮。食わず嫌いっていうよりは好き避けみたい」

喉の奥の小さな池が決壊したように、氣道がじわっと熱くなる。頭の中にあふれ出た言葉全てを言ってしまうと、突然視界がクリアになった。

「そうなんだ……」

星原さんがほわんと口を開いてこちらを見ている。いよいよ本当に、嫌われてしまったかもしれない。

「でも、オットセイの楓子ちゃんも可愛いんだろうね」

頓珍漢な答えにわたしは泣きそうになる。そうだ。あなたのそういうところが、わたしは好きなのだ。たとえあなたの苗字が「どて煮」だったとしても、好きになつていたに違いない。自分の中身を見せるのが怖かったのは、星原さんだからだ。

「星原さん、結婚したいです」

言葉に出した瞬間、視界が滲む。

「好きだから。名前とかじゃ、なくて……」

声が震えていて、我ながら情けなかった。視界が水つぽいせいで、星原さんの輪郭がぼやけている。どんな表情をしているのか分からない。それでも、わたし専用のブライダルインナーがわたしの背筋を正してくれている。

「どて煮、食べに行こうね。楓子ちゃんと一緒に全国の名店を巡ってみたいな。一生かけて」

星原さんの優しい表情が飛び込んでくる。

「一生……」

「今だから言うけど、初めて会った日に楓子ちゃんがこっそり俺の服のタグを切ってく

れたときから、この子と結婚したいと思つていたんだよ」

一瞬で視界がクリアになった。

「気づいて、いたんですね……」

とてつもなくこの人に触れたい、と思ひ星原さんの手を握った。星原さんは一瞬驚いたように息を止めたが、すぐに強く握り返してくれる。

「今度、この先にある麻辣湯のお店にも行きたいんです」

「いいね。そういえば、もうすぐスタバでかぼちゃの新作フラペチーノが出るらしいよ。またホワイトモカを追加して飲んでみたいね」

「星原さんのカスタマイズはホワイトモカ一択なんですね」

最初のマッティングアプリでのやり取りを思い出して思わず笑つてしまう。人がごった返す華金の船橋駅周辺が、初めて綺麗に見える。

「僕は好きになったものに対しては一途だからね」

それは、多分わたしもです。心の中でこっそり返す。わたしが今私服の下にブライダルインナーを着けていると知つたら、星原さんはびっくりするだろうか。それとも、星原さんのことだから、「そういう日もあるんだね」とあつさり受け入れられるだろうか。強い締めつけが、すごく心地いい。

「あの、星原さん」

「なあに？」

「苗字、どっちのにしましょうか」

横断歩道を挟んだ向かいのたい焼きの香りが、鼻に運ばれてくる。食欲を思い出したかのように、ぐうと腹が鳴る。甘いものを食べよう。生きよう。一番内側を支えてもらっているし、一番内側を自分自身で認められたから、もう大丈夫。背筋をしゃんと正したわたしは、大好きな人の隣で軽やかな一歩を踏み出す。

f i n

【文学賞】

おじいちゃん。ボク、友だちが出来たよ

高 橋 めぐる

「ひろきー、もう出れるー?」

「うん、今行くよー」

二階の部屋まで、ママの大きな声が聞こえる。ボクは返事をして、急いで一階に向かった。

宿題と服をリュックにつめて、これからおばあちゃんの家に一週間、ボクは家族でとおとまりに行くんだ。

小学五年生になって、去年より六センチも大きくなったボクに、今年も夏休みがやってきた。

いつも夏休みには、おばあちゃんの家に行く。夏の思い出は、いつだってそれでいっぱいだ。

おばあちゃんの作るごはんはとってもおいしいし、おじいちゃんはボクのやりたいことを、何でもいっしょにしてくれる。毎日いろんなことがあって、苦手な絵日記もどんどん書けちゃう。

でも、今年はちがう。おじいちゃんが去年、病気で死んじゃったから。

一人ぼっちになっちゃったおばあちゃん。「よく来たねえ」って、わらってむかえてくれたけど、なんだかさびしそうに見えた。

朝になると、おばあちゃんは黒いタンスみたいなものの前にすわって、手を合わせていた。そこにはおじいちゃんの写真があって、おかしやおにぎりがおいてある。

「これなに？」

「これはね、仏壇。ぶつだん。ここからおじいちゃんがね、みんなのこと見ていてくれるのよ。

それと、おじいちゃんのおなががすかないように、食べものをおそなえしてるの」

それを聞いて、ボクもおばあちゃんのマネをして、手を合わせて「おはよう」って、おじいちゃんにあいさつした。

「お外で遊んでらっしゃい」

ママはそう言って、虫あみとカゴを持たせてくれた。

サンダルをはいて、外に出る。でも、今年のボクは一人ぼっち。虫取りなんてちっとも

楽しくない。ここには学校の友だちもいないんだ。

おいちゃんのいない夏。遊んでくれる人のいない夏。セミの鳴き声が、去年よりうるさい夏。ボクはもう、夏休みが好きじゃなくなった。

太陽のせいで、ジリジリと暑い。まぶしい。これからどこに行こう。

近くの田んぼにすわりこんで、流れてる水をながめた。なんだかすずしい気がする。水の中に、小さな魚がいっぱいいるのが見えた。メダカかな？

魚にさわってみようとした時、後ろからザリ、ザリツと、地面がこすれる音がした。

「そこで何してんだ？ カエル取りか？」

ふり返ると、そこには同じ年くらいの男の子がいた。

丸ぼうずで、白いタンクトップに短パン。おにぎりを食べながら、缶^{かん}コーヒーを持っていた。

「何もしてないよ、見てただけ」

「見てるだけで楽しいか？」

「楽しくはないけど……することがないから」

男の子はボクのとなりにしゃがんで、いっしょに田んぼを見つめながら、おにぎりを口につめた。それから口をもしゅもしゅと動かし、ゴクンと飲みこむ。

「することがないだって？ オレは毎日やりたいこといっぱいあるぞ。お前、かわって

るな」

「君こそかわってるよ。なんで大人みたいにコーヒー飲んでるの?」

「オレだって、こんな苦いものなんかイヤだけどさ、朝起きると、だれかが食べものといっしょにおいていくんだ。だからしょうがなく飲んでる」

「だれかって?」

「オレにもわかんない」

おたがいに首をかしげちゃって、へんな感じ。

「とにかくおいてあるんだよ」

「そんなの食べてだいじょうぶなの?」

「今のとこな。たぶんオレがいい子だから、サンタが毎日来てくれてるんだぜ」

そう言つて、ニッとわらう男の子。

ボクは「そんなわけないよ」と言いそうになったけど、もしかしたらそうかもしれない。

「ふしぎなことはみんな、神さまかサンタさんのおかげなの」って、ママも言つてた。

「なあ、やることないんだろ? カブトムシ取りに行こうぜ。いいとこ教えてやる」

「うん」

「オレ、コータ。お前は?」

「ひろき」

「よろしくな、ひろき」

手を引っぱられるまま、コートのお気に入り場所へとついて行くことにした。

田んぼ道を走りながら、さっきの缶コーヒーのことが気になった。

（どこかで見た気がする……）

考えたけど、日ざしと暑さがすごくて思い出せなかった。

十分ほど走って着いたのは、近所の公園のとなりにある大きな木。コートが「これがた
くさんカブトムシのいる木だ」って教えてくれたけど、ボクはもうこの木のことは知って
いた。

「この木？ これなら前におじいちゃんに教えてもらったよ」

「ええ！ オレだけしか知らないと思ってたのに！」

「これで三人が知ってる木になっちゃったね」

「ちえっ、つまんないの」

「……あ、そうだ。二人だけのひみつだったんだけど、コートにも教えてあげるね」

去年、ママにはナイショだった、おじいちゃんにスーパで買ってもらったシャボン玉
セット。少しのこったから、また来た時に遊ぼうと、箱に入れてとっておいた。それを、
おじいちゃんが「ここならゼツタイ見つからないぞ」って言うから、岩の横にうめておい
たんだ。

土をほっていくうちに、かくしていた箱のほかに、見たことのない人形が見つかった。これ、だれのかな。

「あ、お前！　なんでオレのひみつのかくし場所まで知ってるんだ！」

「え、これコータの？　同じ所にうめないでよ」

「いや、ここはゼツタイにオレのが先に見つけてた！」

バツと、コータは人形をボクから取りあげた。

「それなに？」

「セブレンジャーのセブンブラックだ。知らないのか？」

「そんな古そうなの知らないよ。いつやったの？」

「知らない!?　こんなにかっこいいセブレンジャーを知らないなんてもったいない。オレが教えてやる」

人形の手足を動かしながら、へんしんシーンのマネをし始めた。知らないヒーローだったから、ボクはとなりでシャボン玉をしながら、ノリノリで遊んでいるコータを見ていた。そのあとも、ボクはおじいちゃんがいなさびしさをほとんどわすれて、一日中コータとあたりをかけ回って遊んだ。

気がつくと、十七時のチャイムが流れ始めていた。ママには、これが聞こえたら帰ってきなさいって言われてる。

「ごめん、もう帰るね。また明日遊ぼう」

「おう。じゃあオレも帰ろうかな」

帰ると言ったのに、コータは近くの暗い森に入ろうとしていた。そんなところに、だれの家もないはずなのに。

「ねえ、そっちは森だよ」

「知ってる。森の中のひみつきちに住んでるんだ」

「え、家はないの？」

「……家、なあ」

コータはうーんと言いながら、地面の小石をけった。

それから遠くに見える、明かりのついたおばあちゃんの家を指さした。

「オレの本当の家はあれだ。でも、なんでかあそこには母ちゃんも父ちゃんもない。知らないうちに、オレの家じゃなくなっちゃった」

「え……あれはボクのおばあちゃんの家だよ」

「お前の？　じゃあオレの家は？」

「それは、わからないけど……」

さっき話した食べものと同じように、ふしぎなことを言い出すコータ。また二人して首をかしげてしまう。自分の家なのに、自分の家じゃなくなっちゃってどういうこと？

親がいなくなったって、君はそれで平気なの？

いろいろ聞いても、コータはまた、うーんとつぶやいて、こまってしまっただけだった。

「もうオレの家じゃないけど、たまに遊びに行ってるんだ。あそこのばあちゃん、いつも一人でいるから、ちょっとおしゃべりしにさ」

「おばあちゃんに会ったことあるんだ」

「何回もあるぜ」

「ねえ、よかつたらうちにおいでよ。森なんかで一人でいることないよ」

また、うーんとうなる。コータ、なんだかこまってばかりだ。

「でもなあ……オレさ、夜にどこでねても、朝になるとひみつきちにいるんだ」

「え、どうして？」

「ねぞうが悪いんだろうな。こんなとこまで転がってくるなんて、自分でもびっくりなんだけどさ」

本気かわからないけど、コータはそう言ってわらっていた。

「そんなへんなクセ知ったら、ばあちゃんがおどろいちゃうだろう？ だから行かない。

明日、またここに来てくれ」

そう言いのかして、森の中に入っていつてしまった。おいかけようと思ったが、チャイムが鳴り終わり、ボクは家に急がないといけなかった。

家に帰ると、おばあちゃんは大きな木のテーブルに、山のようなポテトサラダを運んでいた。

「あら、おかえり。もうごはんにするから、おじいちゃんにただいまって言うておいで」
ボクは仏壇の前にすわり、手を合わせた。

「おじいちゃん、ただいま。今日はカブトムシとカマキリつかまえたんだよ」
虫カゴを見せていると、あることに気がついた。

「あ、これ」

仏壇におかれていた缶コーヒー。それは、コータが今日持っていたのと同じものだった。
そうか、どこかで見たと思ったら、おじいちゃんがよく飲んでたやつだ。

思い出せずにいたこともわすれていたけど、なんだかすっきりした気分になった。

「ひろき、おそいぞ」

「何時なんて決めてなかったでしょ」

次の日、森の入り口に行くと、コータはもう待っていた。木によりかかって、せんべいをバリバリとかじりながら。

「もう十時！ オレなんて九時からここににいるのに！」

「ごめん、明日は九時に来るよ。ねえ、アイス、ソーダとイチゴどっちがいい？」

今日も暑いだろうからと、家から持ってきたアイスをコータの前に出した。

「あー……オレはいい」

「なんで？」

「せんべい食べてたら、歯がいたくなっちゃったからさ」

「お年よりみたいなこと言うね」

「誰がジジイだ！」

「そこまでは言っていないよ」

一人で食えることになるとは思ってなかったアイスを急いでかじる。

二本目のソーダアイスはとけ出して、食べ終わる前に地面に落としてしまった。ボクはあきらめて、それは近づいてきたアリにあげることにした。

「アリもアイス食べたら、すずしくなるのかな」

「オレたちより小さいから、寒いくらいかもな」

「たしかに……あ、でもいっぱい来たよ。分け合ったらちようどよくなるかも」

「今度は足りないんじゃないか？ ほら、オレのせんべいもやるよ」

コータはせんべいをバリバリとくだいて、アイスを楽しんでるアリたちの上にふらせて「しょうゆせんべいの雨だぞー」と楽しそうにわらった。

「きつとよろこんでるぜ、このアリたち」

「おんがえしに来てくれるかもね」

「ほー、何してくれるんだ？」

「アメ玉のプレゼントとか」

「落ちてたやつじゃん！ もっといいものよこせよなー」

ぶーぶー言いながら、せつせとせんべいをかかえて帰っていくアリを二人で見まもった。

「で、今日は何するの？」

「そうだなあ」

なやみながら、コータはきのうと同じ缶コーヒーのプルタブを、カコンツと開けた。

「そういえば、そのコーヒー、ボクの家にもあったよ」

「へえー。まあ、そんなにめずらしいものでもないしな」

「せんべいに合う？」

「いいや」

コータは、一口飲んではいおいしくないって顔をしながら、グツと飲みほした。

「なんでムリして飲むの？」

「キライだからって、すてたらもったいないだろ？ よし、今日は公園に行くか」

公園に着くと、ボクの知らない新しい遊具の遊び方を、チャイムが聞こえるまでひたす

ら教えてくれた。

遊び終わると、コートはきのうと同じように、また森へと帰っていく。暗いのに一人でこわくないのかな。

ボクは家に着くとすぐに、今日は公園で遊んだり、アイスをアリにあげたことを、仏壇にいるおじいちゃんに話した。

話し終わって、台所にいるママのところへ行こうとした時、写真の前におかれたものに気づいて、思わず声が出る。

「あー」

今日はコーヒーだけじゃなくて、しょうゆせんべいまで、コートが持っていたのと同じものがならんでいた。

（おじいちゃんにあげてるのと同じものを、なんでコートが持ってるんだろう）

なにかひつかかる感じがする。たまたまいっしょなだけかも。だけど、二つもそろうなんてことあるかな。なんだか気になる。

ボクは、これにはきつと理由があるはずだと思った。でも、なんだろう。

ふと、国語の教科書で読んだ話を思い出した。ある日、天国に行ってしまったクラスメイトが、学校の先生になって帰ってくる話だ。

(コートって……まさか、おじいちゃん？　もしかして、帰ってきてくれたの？)

そう思ったけど、本当にそんなことがあるわけない。あれは教科書の中だけの話なんだ。

でも、とっておきのカブトムシの木を知ってたのも、ひみつのかくし場所が同じなのも、コートがおじいちゃんだからじゃないのかな。

そういうえば「キラいな食べものでも、すてたもったいない」って、おじいちゃんもよく言ってた。

考えるほど、二人には同じところがあるように思えてきた。本当に、あの話と同じことだっておきるんじゃないかって気がしてくる。

そうだ。もし、明日も同じ食べものを持っていたら、思いきって聞いてみよう。そうすれば全部わかるはずだ。

おじいちゃんだったとしたら、コートは幽霊ゆうれいってことになるのかな。おぼけはちょっと苦手だけど、おじいちゃんならちっともこわくないよ。

夜ごはんを食べて、すぐふとんに入ったけど、なんだか気持ちさがソワソワしてねむれそうになかった。

おねがい、早く朝になって。早くコートの所へ行きたいんだ。

「ひろきー、朝ごはんよー」

ママの声が聞こえて、すぐにパチッと目を開けた。

ごはんの用意をしているママたちにおはようと言いながら、急いで仏壇に向かう。手を合わせながら、今日はどらやきと缶コーヒーがおいてあるのを、ボクはしっかりと見た。

「ひろきはえらいねえ。毎日おじいちゃんにお話しして。きっと天国でよろこんでるわねえ」

おばあちゃんは、たまごやきを運びながらそう言った。

あのね、おばあちゃん。ボク、もしかしたら本当におじいちゃんと毎日お話ししてるかもしれないんだ。

きのう言った通り、九時に森へと向かうとコータがいるのが見えた。さっき見たばかりのどらやきを食べながら、地面にはあの缶コーヒーをおいて。

ボクは心の中でよろこんだ。

（コータは本当におじいちゃんなのかもしれない……！ 教科書の話みたいにな、ボクやおばあちゃんに会いに帰ってきてくれたんだ！）

走ってきたわけじゃないのに、なんだかドキドキして苦しくなる。

「おはよう、朝から暑いな」

あいさつを返すより先に、ボクはこの夏休み一番の大きな声で聞いた。

「ねえ！ コータって、もしかしてボクのおじいちゃん!？」

「……今日は早く来たと思ったら、まだねぼけてるな」

いきなり何を言い出すのかと、どらやきをかじりながらあきれた顔をしていた。そんなコータに、ボクはきのうの夜に考えてたことを話した。うなずきながら、ちゃんと聞いてくれたけど、返事はなんだかさつかなかった。

「お前のじいちゃんなわけないだろ。オレ、まだ小学生だぜ？」

「それはそうだけどさ……」

「幽霊が虫取りしたり、元気に公園で遊んだりするか？」

「するかもしれないじゃん」

「見ろ、こんなにっばな足だつてあるだろ」

「足のある幽霊だつているよ」

「今はお昼だぞ」

「夜しか出ないなんてルールがあるわけじゃないでしょ」

ボクはムキになっていた。コータの言うことはどれも正しい。そうやって言われると、たしかに知ってる幽霊とはぜんぜんちがう。

でも、おじいちゃんと同じ食べものや、同じひみつ、それからよくわからないふしぎな出来事。それに何も意味がないなんて、ボクには思えないよ。

「じゃあ……ドーナツだ」

「ドーナツ？」

いきなり出てきた、よく知ってるおかしの名前をくり返した。

「そう、ドーナツ。オレ、まだ一回しか食べたことないんだ。その話が本当なら食べさせてくれ。そしたら、幽霊かもしれないってみてめてやる」

「かもじゃなくて、ゼツタイそうだって」

ボクが何度言っても、コータは自分が幽霊だとは言わなかった。しつこくしてしまっただけか、おこってるようなしずかな声で言った。

「……そうやって人のこと、死んだ人間みたいに言うのはやめたほうがいいぞ。オレはちゃんと生きてるんだ」

いつも明るくわらっているコータが、悲しそうな顔をしていた。

コータから返ってくるのは、ボクが思っていたのとちがう言葉ばかりだ。さっきまであったうれしい気持ち、ゆっくりと消えていく。

「コーヒーやせんべいと同じだったくらいで大きすぎだ。全部たまたまに決まってるだろ。それだけで幽霊だなんて、お前、それでも友だちかよ」

ボクのことをふみつけるような言葉に、心がいたくなっていく。

そうだね。コータがおじいちゃんのはずないよ。本当にボクのおじいちゃんだったら、

こんなこと言ったりしない。

「……コータなんて、もう友だちじゃないよ」

そのまま口をギュッとつぐんで、下を向いた。悲しくて、くやしくて、なみだが出そうになるのを、ぐっとガマンした。

「……」

よくしゃべるコータが、何も言い返してこない。ミーンミンミーン……。ジジジジジ……。ビビビビビ……。セミの声しか聞こえない。何も言わずに立っている。

それが急にこわくなって、ボクの中のモヤモヤした気持ちはなくなり、体に冷たいものが走る。

(あ……)

自分の言ったことを思い出す。

『コータなんて、もう友だちじゃないよ』

ちがう。そんなこと思っていないのに。ママに「ひどいことは言っちゃダメ」って言われてたのに。

ひどいことを言ってしまったという気持ちと、ボクは悪くないという気持ちがぶつかりあう。そのせいで、すぐにあやまれなかった。

コータが今どんな顔をしてるのかなんて見られない。下を向いたまま、おばあちゃんの

家へと、ボクはにげるように走り出した。

あれから三日。コータには会ってない。

暑いから外に行きたくないと言って、ずっと部屋で宿題をながめていた。絵日記、今年はずんぜん書いてない。

おばあちゃんの家に来て、もう一週間。明日、ボクは自分の家に帰る。コータにひどいことを言っただけ。

一人ぼっちのボクと遊んでくれた大事な友だちだったのに。幽霊だなんて決めつけて、きずつけてしまった。おじいちゃんが帰ってきてくれんだと思って、うれしかったんだ。うれしくて、コータの気持ちを考えてなかった。いきなり君は幽霊だとか、おばけだとか言われたら、だれだってイヤな気持ちになるよね。

明日、あやまらなくちゃ。遊ぶ時間はもうないかもしれないけど、あやまることは出来る。「友だちじゃないなんて思っていない、遊んでくれてありがとう」って言わなくちゃ。

夜、おばあちゃんはいつもたくさんのおかずを作ってくれていた。やっぱり、おばあちゃんのごはんはおいしい。ボクはたくさんおかわりした。

食べ終わると、おばあちゃんは言った。

「明日でひろきたち、帰っちゃうのねえ。にぎやかだったのに、さびしくなるねえ」

それからボクをギュウツとだきしめて、何度も頭をなでてくれた。おばあちゃんから、まだいっしょにいたいって気持ちがつたわってくる。

「おばあちゃん、今年は冬休みも会いに来るよ。ママに言ってみる。いっしょにお正月におもちつきしよう」

「それは楽しみだねえ。それじゃあ、いっぱいおせち作っておかなきゃねえ」

おばあちゃんはボクをだきしめるのをやめて、ニコニコと仏壇の前にすわった。

「ひろき、今度はお正月に会いに来てくれるそうですよ。今年もとってもいい子で、こんなにうれしいことないですねえ、^{こうた}康太さん」

ボクはその時はじめて、おじいちゃんの名前を知った。

手を合わせながら、聞きおぼえのある名前に、写真をじつと見つめた。これもたまたまだって、コータは言うのかな。でもボクは……やっぱり帰ってきてくれたと思いたい。

立ち上がろうとするおばあちゃんの手を取って、引き止めた。

「ねえ、おばあちゃん。ドーナツ作りたい。おじいちゃんが食べたいって言ってたんだ。それからコーヒーじゃなくてボクのジュース、あげてもいい？」

いきなりのおねがいだったのに、おばあちゃんはやさしくうなずいた。

朝起きて、ボクはおじいちゃんの写真の前に、作ったドーナツとオレンジジュースの缶をおいた。よろこんでくれてるかな。

ママに「今日は帰るから出かけちゃダメ」って言われたけど、すぐにもどるからって、森の入り口に急いだ。

森に近づくと、遠くからでもわかるくらい、ブンブンと大きく手をふっているコートが見えた。

「ひろきー！ 見ろ、ドーナツだ！ あの話、本当だったんだな！」

まるで何事もなかったみたいに、うれしそうにコートは走ってきて、ドーナツを持ってはしゃいでいた。

「食べたって言ってたから、きのうおばあちゃんと作ったんだ。それと……あやまりたくて」

「何を？」

「もう友達じゃないなんて言ってごめん。いっしょに遊んでくれたのに、あんなこと言って……」

「なんだ、あれくらい口ゲンカにもならないぜ。いきなり帰っていったのは、びっくりしたけどさ」

ぜんぜん気にしないぞと、コートは言った。

「オレもあやまらなきゃな。あの時、お前の話を悪く言ったから、おこって帰ってったんだよな？　ごめん、言いすぎたよ。でも、聞いてほしいことがあるんだ」

一口だけのこしたドーナツを、食べ終わるのがもったいないと見つめながら、あのさ、と話し始めた。

「この前はちがうって言ったけどさ……オレもひろきの言う通り、自分が幽霊なんじゃないかって思う時があるんだ。たまに、だけどな」

コータはドーナツを見つめたまま、落ちついた声でつぶけた。ボクはだまって聞いている。た。

「おいてあるものしか食べられないし、母ちゃんはいないし、おかしいことばっかり起こるしさ」

「……」

「でも、オレは生きてるし、ちゃんとここにいます。そうだろ？　何かがへんだってことはわかってるけどさ、もしかしたらオレは……なんて考えたくないんだ」

落ちこんで、うつむいていく。声も小さくなっていく。

「そんなの、こわいじゃんか」

なきそうなコータに、ボクはなんて言ってあげればいいかわからなかった。

やっぱり、ボクはひどいことをしてしまっていた。そんなふうに思っていたなんて知ら

なくて、問いつめて、イヤな思いをさせてしまったんだ。

何も言えないままだったけど、コータはいきなりバツと顔を上げて、いつものように元気な声で言った。

「でもな！ 幽霊なんていないって、お前のばあちゃんも言ってたからな！ いらないんだ！ だからオレは幽霊なんかじゃない！」

その言葉に、ボクはうなずいた。

「うん、そうだね。おばあちゃんが言うんだから、まちがいないよ」

「だよな！」

ニコツと、安心したようにわらった。そのえがおを見て、ボクもいっしょにわらった。

「コータはコータ。ちゃんとここにいる、ボクの友だちだよ」

「そう、オレはオレなんだ。いいこと言うじゃん。それを言いたかったんだ」

のこりのドーナツをかみしめて、オレンジジュースを止まることなくゴクゴクと一気に飲みほした。

「ボク、今日家に帰らなくちゃいけないんだ」

「もう？ ぜんぜん遊べなかったな」

「でも、すごい楽しかったよ」

「お前が帰ったら、またばあちゃんがさびしくなるだろうな」

「うん……だからさ、ボクがまたここに来るまで、コートがいっぱいおばあちゃんに会いに行つてあげてよ」

「ああ、いいぜ。いくらでも話し相手になつてやる。やくそくだ」

コータは、たのもしく親指をグツと立てて「まかせとけ！」と言つた。これで、コートもさびしくないよね。

遠くに見えるおばあちゃんの家が目に入る。そうだ、ママにすぐもどるつて言っちゃつた。もう行かないと。

「じゃあ、またね」

「おう、元気だな。ばあちゃんのことには心配すんな、たまには遊びにもつれ出してやるからさ」

「うん、よろしく。でも、ほどほどにね」

まだしゃべり足りなかつたけど、ボクは家へと歩き出した。

離れても、ボクにまで聞こえる大声で「ひろきー、早く帰つてこいよー」と言いながら、ずっと手をふつていた。

次に会う時は、もつといっぱい遊びたい。まだひみつきちだつて見せてもらつてないし、話せてないことがまだたくさんあるんだ。

（冬休み、また会えるよね）

ボクはなんだか急に心配になって、もう一度森のほうにふり返った。

だいぶ遠くなっていたけど、コートはちゃんとそこにいて、まだ大きく手をふってくれていた。ホツとして、ボクもそれに大きく手をふり返す。

（会えるにきまつてる。やくそくしたんだ）

ボクはもう、コートがおじいちゃんであつても、そうでなくてもいいと思った。たとえばどれだけふしぎなことがあつたつて、大事な友だちだつてことには、かわらないんだから。おばあちゃんとコートが待っていてくれる。そんな冬が早くきてほしいと思いながら、ボクは暑い田んぼ道を走りぬけた。

【文学賞】

いつか小学生だったあなたへ

橋 本 恵 実

もう一度紅組の大玉を転がしたい

プール後の眠気と南風に包まれたい

たくさんの人と音を重ねたい

50 m 走ることに全ての力を振り絞りたい

好きだったあの人のトレーに揚げパンを乗せたい

イチヨウの葉を蹴散らしたい

校庭の野良猫に睨まれたい

ノートにくだらな絵を描き加えたい

それを友達に見せて笑い合いたい

破れたフェンスの横に登りたい

職員室のドアの先のコーヒーの匂いを嗅ぎたい

廊下の白い点を踏んで歩きたい

渡り廊下を満たす日差しを浴びたい

墨汁が新しい服に跳ねたことを嘆きたい

三角巾の不在に焦りたい

超えられる跳び箱の段が増えたことを喜ぶたい

雨の朝昇降口で傘の雨粒を吹き飛ばしたい

図画工作の悩みを人生の悩みだと勘違いしたい

先生に褒められても嬉しくない素振りをしたい

それでも夕飯の時間に誉められたんだと母に誇りたい

理不尽な説教に泣きたい

傷つけた友達に謝りたい

傷つけられたことに怒りたい

転んだ後保健室に手をひいてくれたあの子にありがとうを言いたい

熱を測っても36・7度で落胆したい

教室の後ろにいるメダカを眺めたい

ふと目が合うとはにかんだ君の顔を見たい

窓から入ってきた虫に悲鳴を上げたい

先生が電気を消して大丈夫だとなだめるのを聞きたい

それでも出ていかない虫に怯え笑いたい

種を植えた朝顔が咲いた日に微笑みたい

体育館のネット裏に乗ったボールを取りに行きたい

朝読書のためにと本をたくさん借りたい

まとめ書きの1行日記を真面目に書いた振りして書体を変えたい
音読をしたい

鉛筆書きの字をマッキーでなぞりたい

赤青鉛筆の赤ばかり減ることに困りたい

新しい消しゴムでこちょこちょと字を消したい

席替えを人生イベントと捉えたい

班長をじゃんけんで決めたい

大切なあの子に書記係を譲りたい

人に譲ってくれていた子が大変な思いをしていないか確認したい

給食のメニューに一喜一憂したい

掃除の時間に遅れたい

上履きを洗うのは面倒くさい

休日に暇を持て余したい

友達を遊びに誘いたい

眠る前に明日の準備をしたい

毎朝当たり前のようにおはようを言いたい

じゃあねではなくまた明日ねと別れたい

深夜日を跨がずに深く眠りたい

たくさんの夢を見たい

永遠に明日は来るものだと思いたい

未来なんて全く想像できないんだと答えたい

大人になんかなりたくない

それでも大人になる自分を信じたい

生きていて楽しいと言いたい

それが嘘だという言葉は拒否したい

楽しいんだと泣きながら主張したい

泣きながらも生きたい転びたい戸惑いたい

泣いているあの子にハンカチを渡したい

一緒に悲しみに暮れない

優しく泣くあなたは美しいんだと伝えたい

生きたい生きたい知りたい見たい

あなたと一緒に生きていきたい

この思い出を抱えて生きていきたい

【文学賞】

火を渡す

愛川 弘文

高根木戸の「木戸」は牧場の門のこと草原に立つ幻の馬

自転車の高校生が駆け抜ける「木戸」の辺りを奔馬のように

定年後の講師は教師の「延長戦」 必要ならばマウンドに立つ

辻に立つ道標「文化五年辰」 令和辰年生徒がよぎる

三叉路の延命地藏の道標の「大あな道」が通勤路なり

斎場の裏に船橋東高隣り合わせのメモントモリよ

行き倒れの僧を祀った墓のあと「聖人塚」しょうにんづかが最寄りバス停

「授業だけの時間講師は楽しいぞ部活も校務も知らぬ存ぜぬ」

副担と書いて「尻ぬぐい」と読むと友は語れり出席簿持ち

「ふなひが」と生徒は呼べり親しげに母校を身体の一部のように

校庭の木陰に憩うカップルヘモールス音で鳴き交わす鳥

国語にはさも論理などないように「論理国語」と言う新科目

差のつかぬ新評価法　どんぐりの頭をさらにたたいて並べ

ICTそれは所詮は方法論大事な中身はすり減っている

ハルジオンとヒメジオンの違い説きながら脱線授業もいいなと思う

若紫も葵もやっていないという三年生の「古典」に悩む

葉桜を木の間隠れに渡りゆく四十雀を聞く聖五月かな

「みなごろし」という赤い焼酎舐めながら生徒の成績考えている

「しばしば」か「ときどき」どっち　教師らの部活の支出が自腹になるのは

懐かしい高校の師に会うごとし泰山木の象牙色の花

垂乳根の柏葉紫陽花しろじろと梅雨の心は揺れやまぬなり

噴水は急に背伸びをするように高く上がりぬ 見ておらぬ時

花火セツトの袋の中の蛇花火 「陰キャ」はどここのクラスにもいる

教職の「延長戦」もあとわずか 線香花火の玉落とすまじ

鏡にはいつしか亡父が棲みはじめ眺めるたびに我に物言う

花殻の奥に熾火おきびのごと残る百日紅の赤 酷暑の九月

授業中窓から心を捨てている生徒の視線の先の昼月

ろうそくの火のごときもの受け渡す恩師から我 我から生徒へ

準備室の窓辺に匂う沈丁花教師の冬の心をほどく

我もまた峠しんせいの晨星 枯れ枝にいましばらくは点りて居らん

【文学賞】

古牟呂

吉村 さよ子

夏に入る一輪白き床の花

田水張るひかる額縁藍絵かな

白鷺のふわつと抜くる高圧線

一発の吹矢にこむる息涼し

寺町の家並低し夏つばめ

合鴨にまかせて帰る青田かな

豆飯や同じ長さの夫婦箸

稲の花古地図に辿る名主門

道分け石に一陣二陣青田波

ははをまね武蔵野うどん盆用意

日焼子の潮の香つなぐ貝細工

少年のはてしなき夢星月夜

にはとりの羽撃く真昼カンナ燃ゆ

群蝗跳ねて跳ねての移動中

プランターに稔る社の稲雀

小鳥来るゆつくり寝かす麴麴の生地

秋雲を射貫くがごとし槍投ぐる

口開けて鴉の喘ぐ残暑かな

子の来たる背筋を伸ばす敬老日

ずいき汁小ぶりの鍋に事足りて

壁に凭れ朗読を聴く秋の夜

涼新た迷ひ線なきスケッチ画

在歩けば小社多し曼珠沙華

枳の実のころげ落ちたる古墳あと

新米食む古牟呂地産の大袋

棗の実町一軒のカフェテラス

胡麻はぜる音のみ聞きて暮れにけり

紫苑咲く野良着のははは笑むばかり

塵取の中よりもそと枯蠅螂

ノスリ舞ふ古牟呂の空の秋惜しむ